虹色ニュースヘッドライン

○復興の光、宮城にも届け ルミナリエに仮設住宅の子ら

仮設住宅で暮らす小中学生が１２月１０日、阪神大震災から復興した神戸の光の祭典「神戸ルミナリエ」を訪れ、夜空に輝く約２０万個の光の彫刻に見入った。

津波被害の大きかった宮城県名取市などの小学４年～中学３年の３８人。子どもたちに「希望の光」を見てもらおうと、神戸市職員ＯＢらでつくるＮＰＯ法人「神戸の絆２００５」が招待した。

（朝日新聞）

○仙台 被災者の食事に学ぶ催し

電気やガスなどのライフラインが断たれたなかで、被災者がどんな食事をしたかを教訓とし、今後の対策に生かそうという催しが、１２月上旬に仙台市で開催。市民などおよそ７０人が参加した。

催しでは、被災者のアイデアメニューが紹介。お菓子の材料として加工されたコメの粉に水を加えて練った即席の餅や戦時中がヒントとなった「すいとんカレー」など、水や電気が限られた中で工夫された避難時のアイデアメニューが、試食された。

主催した仙台市の市民センターでは、今回、集めた３０のレシピを冊子にまとめ、出版することにしている。

（NHKニュース）

○企業の震災支援1200億円超

物資支援や復興支援での「企業」の力を感じる機会も多かったこの度の震災。経団連の調査によると、３月１１日から９月３０日まで、経済界から寄せられた支援額は約１２１８億円で、このうち、３月中に被災地に送られた支援額は約２３１億円だという。さらに、物資の寄付については、震災の発生直後は食料品・飲料品が全体の４割を占めていたが、現地での需要の変化に伴い、夏頃からは復旧・復興に向けた重機や通信機器などの寄付が増えている。

また、今回の震災では、アンケートの対象企業の社員ら延べ１７万人以上が被災地での支援活動に参加した。

（日本経済新聞）

○大浴場で地域にぬくもりを… 老舗銭湯「つるの湯」年明け営業再開

甚大な被害を受けた石巻市住吉町の老舗銭湯「つるの湯」が、震災を乗り越え来年１月に営業を再開する。

津波でボイラーなどの機材が故障し、施設も地震で大きな被害を受けたが、全面改修に併せてボランティアらが、浴場の壁の「富士山」ペイント、のれん作りなどで協力。杉山さんは、「お風呂を待ってくれている人たちのためにも頑張っていく。利用者同士が和気あいあいと過ごし、銭湯ににぎわいが戻ればなおうれしい」と語る。

（石巻日日新聞）

○東北が好調、被災地支援か 空の便、年末年始の予約

国内航空１０社は１５日、年末年始（２２日～来年1月9日）の予約状況を発表した。東北地方への路線が好調で、前年比で日航は１４・２％増、全日空は１０・４％増だった。両社は帰省客のほか、被災地支援を目的とした旅行やボランティアの訪問が予約増の要因とみている。

（中國新聞）

虹色情報 師走

謙虚で自然体な二人から「がんばろう！石巻」

今年一年のしめくくりとして一枚の写真と共に「社会貢献活動の、まさに原点！」と感じたアクションを一人の石巻市民としてご紹介します。

門脇町５丁目に設置されている「がんばろう！石巻」の巨大看板。横幅が11mの木製です。ちょっと目を凝らせば、日和山からも見える、その力強いメッセージは、市役所が設置したと思っている方も多いはず。

これ、実はたった二人の男性が「何か出来る事をしたい」という一心から始めたものです。「がんばろうだなんて、まだ、不謹慎かな…」という心配を抱きつつも、被災後一カ月、K君は自宅兼会社跡地に高校の先輩S君の協力を得て看板を設置に動き出します。技術者でもある二人は、労力や資材をほとんど自己の持ち出しで、後に鎮魂の場として多くの市民や世界の要人が訪れる、様々なメディアが取り上げる事になる場所を作り上げます。

今この場所は、色とりどりの季節の花が飾られ、夜にはライトアップされ、故郷の人々を勇気づけるメッセージを発信し続けています。いつも自然体で謙虚を絵に描いたような二人は、表立つことを望まない一方、彼らの想いは海を越え、世界中に災害に負けない石巻を発信したと言っても過言ではないようです。

（記事・川村 写真・毎日新聞）

石巻虹色交差点

カラー刷りだからきれいに見えっちゃ！
石巻虹色交差点は、石巻市の震災支援関連情報、生活情報、お役立ち情報をお届けする「つながる情報かわら版」です。

発行：石巻虹色交差点編集チーム
NPO法人アプカス
NPO法人いしのまき環境ネット
連絡先：n.kosaten@gmail.com

虹色集 特

年の瀬なので、明るい話題を詰め合わせます！

ささやかながら発行を続けてきました「石巻虹色交差点」。編集メンバーは、３０代の北海道人3人、石巻人2人というメンバー構成で、皆様の生活にお役に立てる情報をという思いで、単色刷りの発行を続けてきました。年内の最終号ということで、今回は、「虹に希望を託して」をテーマに、カラー版特集を皆様にお届けします。

（編集メンバーは、有坂、石川、伊藤、川村、佐藤です）

スンコチュウ！ オッキグ 背伸びッコ スッペシ！ おらほのラジオ体操

ご当地

動画投稿サイトユーチューブ上で、9月下旬より公開されている「おらほのラジオ体操」（おらほのラジオ体操実行委員会作成）が、人気を博している。このラジオ体操の掛け声はすべて「東北弁」。ご当地版ラジオ体操なのだ。

このプロジェクトは、石巻発の地域コミュニティ再生プロジェクトとして、「お国言葉」のラジオ体操が、地域住民の連帯感を高め、人と人とがつながるきっかけになればと、被災半年後の9月上旬に石巻市内で撮影され、ユーチューブに公開された。

東北弁がわからない人々にとっても、東北弁の素朴で温かな響きと参加者の明るい表情から元気をもらえるという声が多く、ネットで話題になっている。音楽CDも販売され、売り上げは、復興義援金に使われる予定。

住環境 仮設ではなく本設に入る選択肢を提示

東日本大震災の津波で家を失った人たちに、仮設住宅ではなく、長く住み続けられる恒久的な住宅を提供しようと、地元木材を使った復興住宅を宮城県石巻市に建設している。

この復興住宅は、東京の工学院大学が、企業や個人からの寄付で石巻市の高台に建設を進めている一戸建ての住宅で、平屋と２階建ての合わせて１１棟。年内に入居できる見通しになり、１１月下旬に、入居を予定している白浜地区の漁業者などを対象に、内覧会が開かれた。

工学院大学によると、災害復興住宅は、大量に建設する必要などから鉄筋コンクリート造りになりがちであるが、この復興住宅は宮城県産の杉を使っていて、地元の林業や工務店にも貢献できるほか、地域の景観も守る配慮も行われている。

仮設住宅の入居期間は原則２年となっているが、この復興住宅は入居期間に制限はなく、将来的には増改築もできる。ＮＰＯを通じて貸し出され、家賃は1か月最大２万７０００円に設定されている。家族５人で入居する予定の５４歳の漁師の男性は「安心していられる場所が定まってうれしい。これから、震災の前の生活に戻れるよう頑張っていきたい」と語る。

工学院大学の後藤治教授は、「こうした復興住宅が、津波で被害を受けた地域に広がっていけばと思います。住民の生活とともに豊かな地域に戻ってほしい」と思いを語った。

（NHKニュース）

地元産の木のぬくもりを感じる空間

陸前高田「奇跡の一本松」種子から苗18本育成

一本松

岩手県陸前高田市の景勝地・高田松原で、東日本大震災の津波に耐えて残った「奇跡の一本松」の後継樹育成に取り組んできた住友林業は、種子から苗１８本の育成に成功したと発表した。震災後、一本松の種からの子孫誕生は初めてという。

同社は種からの実生苗に加え、挿し木、接ぎ木、組織培養を試み、接ぎ木でクローン苗３本の増殖も果たした。実生苗は照度、温度、湿度などを調節した人工気象室でポットに植えられ、約４センチまで生育している。

プロジェクトは、日本造園建設業協会岩手県支部などの依頼を受けて４月下旬にスタート。研究者、技術者計５人を現地に派遣して枝や松ぼっくりを採取し、バイオ技術による育成を開始した。

松ぼっくりを細かく解体し、内部に残っていた種子２５粒を回収。試験的に３粒をシャーレにまいたが発芽の兆候がなかったため、冬越しの状況をつくって成熟させようと、半年ほど低温処理した。その種を再びまいたところ、１８粒から芽と根が出たのを確認した。

苗が順調に生育すれば来春には温室、次の春には畑に移される見通し。植栽可能な３０～５０センチになるには、７～８年の期間を要するとみられる。将来的には陸前高田市内に移植する方針という。

一本松は約７万本あった高田松原で唯一残った「復興への象徴」だったが、海水などの浸食で根が損傷し、生育への保存活動を断念せざるを得ない状況になっていた。

住友林業筑波研究所の中村健太郎主席研究員は「一本松は残念な結果になったが血筋は残り、希望の道は途絶えていない。まだ小さく弱い光だが、復興に一役買ってくれると思う」と話した。

（河北新報）

心に残るメッセージ・言葉

みなさん日本の方も過去に、第二次大戦、そして広島、長崎とという二つの被爆体験を乗り越えたのです。それら計り知れない破壊を経験したにも関わらず、日本人のみなさんは決意と自信を失わなかったのです。戦後、勤勉に働かれ、破壊の灰から復興をとげられたのです。みなさんにはそうした精神があります。
この街を建て直し終わったその時に、新しく建て直された幸せに満ちたこの街に再び私を招くことをどうか忘れないでください。私はその時にまた来ます。みんなで大きなお祭りをしましょう。どうもありがとうございました。

～ダライラマ法王石巻慰霊法要後談話より～

「知恵がある奴は知恵を出そう。
力がある奴は力を出そう。
金がある奴は金を出そう。
『自分は何にも出せないよ』っていう奴は元気出せよ」

～松山千春（自身のラジオ番組で）～

東北のみなさんへ
忘れたことはありません。
いつも自分にできることを考えています。
今回「良い結果を届ける」その一心でした。
メダルを持ってみなさんのところへ会いに行ます。
待っていて下さい。
応援ありがとうございました。
共に歩もう！　東北魂!!

～なでしこジャパン　岩清水梓～
（岩手県滝沢村出身のDF）

命の重さを知るには、大きすぎる代償でした。
しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。

～気仙沼市階上中学校答辞より～

大切な人の似顔絵を記憶頼りに面影再現

ひと

震災で家族や友人を失った人のために、「面影画」と呼ばれる亡き人の似顔絵を岩手県陸前高田市で描いているボランティアがいる。東京のデザイン会社役員黒沢和義さん（57）。「わ、似てる」「そっくり」。絵を受け取った人の顔がぱっと明るくなるのが励みだ。

100人目の依頼者となった菅野勝也さん（73）と向き合った。菅野さんは津波で家を流され、7年前に亡くなった妻の写真も失った。「さんざん苦労をかけたから」と、ずっと大切にしていた。この日は妻が写った写真を友人から借りて持ってきた。完成した絵を受け取り「ようやく妻が帰ってきた気がします」と、笑顔を浮かべながら涙を拭いた。

黒沢さんは6月に陸前高田市に入り、避難所となっていた老人ホームでテント生活しながら、描き続けた。写真がない人の場合は、その人の記憶が頼りだ。約3500人の顔写真を用意し、似た顔を探してもらうこともある。

まず依頼者と面談し、故人への思いに耳を傾ける。亡くなった人との関係や思い出、口癖。ひたすら聞く。故人の人生をたどり、面影を思い浮かべながら絵と向き合う。心に残った言葉は絵に添える。「一人一人の話は重い。描きながら一人で泣いてしまうこともあるんです」。夕方、描き上がった絵を渡す。

きっかけは震災4日後に見た夢だった。被災地のテントの中で絵を描いている自分がそこにいた。場所はかつてヤマメ釣りを楽しんだ気仙川や高田松原が頭に浮かび、陸前高田市と決めた。最初にボランティア活動を受け付ける社会福祉協議会には「需要がない」と断られたが、老人ホームの園長は受け入れてくれた。

8月いっぱいまでの3カ月間と定め、家族と職場の理解を得た。1日に1枚。晴れの日は白いテントがまぶしく、雨の日は絵の具を乾かすのにドライヤーを使う。熱中症になりかけて頭がフラフラしたこともあったが、絵は評判を呼び、気が付いたら予約分を終えるために滞在を延長して、秋になっていた。

（共同通信11月1日）

つながる

豊かな仮設空間を作る。「つながり」ながらも「自分の時間」を過ごす

仮設　みまもる

入居者の孤立を防ぎ、乳幼児から老人まで数世代が暮らす一つの街をつくろうと設けられた「コミュニティーケア型」仮設住宅が岩手県釜石市にある。向かい合わせの玄関やアーケード式のウッドデッキ、敷地内にデイサービスセンターがあるのが特徴。

釜石市平田地区の運動公園に240戸の仮設住宅が並んでいる。その一角、高床式になったデッキで、高齢の女性数人が談笑していた。玄関は向かい合わせでデッキにつながっているので、自然と顔を合わせる機会が増え、アーケードで覆われているため、雨の日もデッキに出てこられる。

1人で暮らしていた市内の自宅を流された山崎百子さん（78）は「デッキでおしゃべりするのが楽しい。みんなと助け合っていける」と笑顔で話した。

『街』は複数の地区に分かれる。スロープがついたウッドデッキでバリアフリーにした「ケアゾーン」が60戸、高齢の単身者や夫婦、障害者がいる世帯が入居する。ママたちが交流しやすいようにと小さい子どもがいる世帯を集めた「子育てゾーン」が10戸。170戸ある「一般ゾーン」は間取りが1DK～3Kで、1人暮らしや3世代までさまざまな形態の家族が入り、普通の街の様子に近づけた。

中心にあるのがデイサービスを受けられるサポートセンター。市から業務を委託された民間の福祉法人のスタッフが24時間常駐する。

難点は市中心部から遠く、バスの本数も少ないこと。一般ゾーンには希望する市中心部の仮設住宅に入れず、ここに来た人も多い。それでも、居住者は「車がないと大変だけど、周りの人と話しやすい環境なのはいい。この間はご近所さんの髪を切ってあげた」と笑う。

次のステップは自治組織づくり。仮設住宅運営センターの小池幸一所長は「この環境を生かし、入居者同士で支え合い、問題を改善していけるようになってほしい」と語る。同様の試みは、遠野市の仮設住宅地区「希望の郷『絆』」でも行われている。

また、子どもの学習環境の整備を行う動きも出ている。仮設住宅などで暮らす中高生が集中して勉強できる環境をつくろうと、岩手県陸前高田市の小中学校3校の教室に自習室「学びの部屋」が設けられ、多くの生徒が通っている。

同市と被災した子どもを支援する団体が運営。退職教員らを配置し、質問にも答えている。市立第一中学では図書室を含む3教室を開放。同中3年の須藤歩美さん（15）は「仮設住宅は部屋が少なく、落ち着いて勉強できない。自習室はみんな集中しているので刺激になる」と話した。

自習室は火曜と木曜の午後7時から同9時と日曜の午前9時から午後3時の週3回開放されている。

（毎日新聞）

〉〉コミュニティーケア型仮設住宅
希望の郷『絆』（岩手県遠野市）

〉〉「学びの部屋」で友人らと自習する生徒たち

そだてる

仮設住宅地区の共同農園開設に助成　農水省

菜園

農業技術を活かす　農作物で癒す

農林水産省は、仮設住宅に住む高齢者らの孤立防止策として、遊休農地などに農園を設け、共同で農作業をしてもらう取り組みを始める。農作業で体を動かすことで、健康増進にもつなげたいとしている。

実施主体は市町村やNPO、農協など。被災して営農を再開できない農家に農作業の講師役を務めてもらう。農水省は、1地区当たり470万円を上限に、講師役の農家に対する賃金やビニールハウスの賃料、農機具の費用などを支援する。農作業の参加者の年齢は問わず、地域住民の参加も見込まれており、同省は「避難生活での孤独を解消し、コミュニティーの形成に活用してほしい」としている。先の三宅島の噴火や新潟中越地震でも、避難先の仮設住宅周辺に農園が整備され、入居者の交流や心身ケアに活用してもらう取り組みが行われ、好評だった。

（読売新聞）

ツイッター支援拡大～情報共有から草の根の物資支援も～

IT

3月11日の震災の夜、避難所で20歳の大学生が世界からPRAY(祈り)を自身で作ったWebサイトに集めた「プレイ・フォー・ジャパン/PrayForJapan」には、48時間で300万人がアクセス。世界中から被災地やニッポンへの「祈り」のメッセージ、被災した中での心温まるエピソードが日本全国から集められ、掲載され続けた。また、ツイッターや情報技術は、見知らぬ市民同士の直接支援のあり方、効率性をも変えた。「一方的な善意は、かえって迷惑になるかもしれない」。それを避けようと、“支援をしたい人と受けたい人”、この双方のニーズや思いをツイッターを利用して繋ぎ合わせ、より効率のよい支援を目指したのが、支援マッチングサイト「twitforyou/ツイートフォーユー」。現在約3万7千人がフォローしている。今の時期は、「ストーブ、衣類、食器、生活雑貨」などが被災地へ届けられている。支援は「モノ」だけではない。被災によって結婚式ができなかったカップルに「結婚式」をプレゼントするという催しの支援も行われており、その可能性はまだまだ広がっている。被災直後立ち上げられたtwitforyouは、9カ月が経った今でも人と人とのつながりを広げ、被災地へのさらなるサポートを展開している。

ツイート・フォー・ユー twitforyou!

家の非常袋を確認したら、
父親が40年前に書いたメッセージが残っていた。
「心に太陽をもて　口びるにうたをもて」
私も新しい非常袋にメッセージを書こう。
見た人が励まされるような

ホームで待ちくたびれていたら、
ホームレスの人達が寒いから敷けって段ボールをくれた。
いつも私達は横目で流しているのに。
あたたかいです。

国連からのコメント「日本は今まで世界中に援助をしてきた援助大国だ。今回は国連が全力で日本を援助する。」

プレイ・フォー・ジャパン
掲載メッセージ

東北大 震災を世界に、未来に伝える試み

伝承

東北大は、東日本大震災に関するあらゆる記録や資料のデジタルデータを収集するアーカイブシステム「みちのく震録伝（しんろくでん）」の運用を始めた。データはインターネット上で公開し、震災関連の研究や復興への取り組み、防災・減災対策に生かしてもらうため、国や自治体、企業など50を超える機関と連携。今後10年でシステムの整備を進め、内容の充実を図る。

今後も、震災発生時やその後の様子を伝える写真、映像、音声、文書のほか、東北大の研究者らの研究結果を収録する。貞観津波（869年）や明治三陸大津波（1896年）など過去に東北で起きた災害の記録も保存。被災地での医療や避難所運営の状況、人間の行動などの記録にも対象を広げていく。データは企業や自治体、国内外の研究者に加え、市民からも提供も受け付ける。東北大災害制御研究センターの佐藤翔輔助教は「千年に一度の震災と言われるが、その先の世代と被災地の外の人にも震災の全てを伝えなければいけない。世代と世代、地域と地域をつなげるプロジェクトだ」と話している。（河北新報）

つたえる